

日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇二四年（令和六年）十二月二〇日
第二號（通卷第四六號）

引此偏懷惟悴人緣介
之下兩三旬之昆の在魚兒
おホ子棠得金る者
送書并別冊

八大人山人「安晚帖」魚圖（泉屋博古館蔵）



◆目録

巻頭言

二 第76回大会を終えて

大木 康

四 点から線へ、そして……

池田 智恵

六 「第七屆 魏晉南北朝文學與思想國際學術
研討會」参加記

吉岡 佑馬

八 「中国文学与比較文学二〇二四年双年会議」
参加記

林 麗婷

一〇 二〇二四年度日本中国学会賞について

一一 各種委員会報告

大会委員会

一二 二〇二四年度 会員動向／新入会員一覧

一四 二〇二五～二六年度役員一覧

一五 日本中国学会 二〇二三年度（令和五年度）
収支決算書

一六 日本中国学会 二〇二四年度（令和六年度）
予算書

一七 事務局からのお知らせ

一九 「会員論著目録（二〇二四年）」作成への協力
のお願い

二〇 「日本中國學會報」論文執筆要領

編集●京都大学人文科学研究所 古勝 隆一

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

メールアドレス：gakkaidayonkyoio@gmail.com

発行●日本中國學會

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
メールアドレス：https://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

斯文会館内

第76回大会を終えて

理事
長
大木
康

日本中国学会第76回大会は、10月12、13の両日、二松学舎大学九段キャンパスにおいて開催されました。二日とも好天に恵まれ、靖国神社、千鳥ヶ淵に近く、地上13階のラウンジからは、武道館の大屋根を間近に望めるキャンパスに400名もの参加を得、盛況のうちに幕を閉じることができました。開催校代表、牧角悦子先生をはじめ、二松学舎大学のみなさまに、改めて御礼申し上げます。

今大会では、次世代シンポジウム（「近代日本における漢学をめぐる諸問題」）、二つの書評シンポジウム（松野敏之著『朱熹『小学』研究』、加納留美子著『蘇軾詩論』）に加え、43件の研究発表が行われました（哲学・思想部会12件、文学・語学部会16件、日本漢学会部会9件、歴史部門6件）。さらに「古典学の方法論」と題する特別講演が行われました。これは、中国学以外の古典学分野で活躍される、ギリシャ哲学の納富信留先生、英語を中心とする言語研究の江藤裕之先生による講演、それに対して中国学の側から小島毅先生のコメントによる、多くの示唆に富む内容の講演会であり、広い中洲記念講堂がほぼ

満員になりました。

日本中国学会の大会については、会場とオンライン併用のハイブリッド形式で開催してほしいとのご要望が多数寄せられているのですが、目下のところ技術的、経済的理由により、なかなかハイブリッド開催が難しいのが現状です。そんな状況の中、このたびの大会では、この特別講演に限ってオンライン配信を行い、会員以外の方にも視聴していただけることになりました。オンラインでも100名ほどの参加者があったとのこと。一つの新しい試みとして、開催校二松学舎大学のご努力を深く多といたします。

来年は、10月11日（土）、12日（日）の両日、九州大学伊都キャンパスにて大会を開催の予定です（開催校代表、東英寿先生）。多くの会員のみなさまが、『魏志倭人伝』でも名高い伊都国の故地に集い、ますますレベルの高い発表が行われることを期待したいと思います。

日本中国学会の大会におけるこのところの傾向を見ても、あたらしく部会が設けられるようになった歴史はもとより、日本漢学部門の発表が増えているようです。そして、発表者の顔ぶれは、留学生の方がかなりの比率を占めているように思われます。海外の研究者が日本独自の漢学に関心をもって研究をされることは、なかなかすばらしいことで、こうしたことは、日本において長い歴史を持つ中国学ならではのことでしょう。

最近、上海の復旦大学出版社から慈波・王汝娟編『日本漢文話叢編』という全五冊からなる本が刊行されました（2024年1月刊）。大部の王水照編『歴代文話』（2007年）、王水照・侯体健編『稀見清人文話二十種』（2021年）などの文話叢編に続き、『域外文話彙刊』の一つとして刊行されたものです。そこには、藤原惺窩『文章達徳綱領』にはじまり、荻生徂徠『文戒』『文淵』、伊藤東涯『文章真訣』、皆川淇園『問学挙要』、齋藤拙堂『拙堂文話・続文話』、そして明治時代の土屋鳳洲『文法綱要』に至るまで、日本人によって書かれたいわゆる文話二十六種が収録されています。詩についてはともかく、漢文の散文について、かつてこれだけ多くの日本人の著作があったと

は、正直驚きでした。考えてみますと、日本には全国津々浦々お寺や神社、公園などに行くと、日露戦争などに従軍された方の顕彰碑やその他多くの石碑があって、それはだいたい漢文で書かれています。明治大正、昭和のはじめごろまでは漢文を書く需要が多くあり、またそれを書ける人がどこにでもいたことがわかります。それが、これだけ多くの文話を生んだ背景にあるのでしょうか。頼山陽の『小文規則』の序文なども「裏嘗て謂へらく、行文は猶ほ用兵のごときなりと（裏嘗謂行文猶用兵也）」ではじまっていて、行文すなわち実際に文章を書くことが主眼になっていることがうかがわれます。その正集の内容は「叙遊」「紀別」「題名」「書後」「識事」など文章のテーマに分けて、歴代の名文集めたものですが、そのコメントには、例えば「叙遊」に「今 古人の落筆蕭疎なる者を取りて以て法則しめを見ず、学ぶ者此に倣ひて、こひねがはくは庶けが乎 山水を疥すに至らざるのみ（今取古人落筆蕭疎者以見法則、学者倣此、庶乎不至疥山水已）」とあるように、あくまで文章実作の参考に資するためのものようです。例えば古文辞派（擬古派）だ、公安派だ、といった文学論についても、そもそもの出発点（実作か研究か）がちがえば、目に見える風景も異なってくるでしょう。いまでも漢詩を作る人はおりますが、漢文の文章を書く必要がほとんどなくなってしまった（書いてみたところで読める人がいない）ことが、文話というジャンルが一種の死角に入ってしまった理由であろうと思われれます。こうした領域が中国の研究者によって発見され、資料が収集、校訂、整理されたわけです。日本人の研究者にすれば虚を衝かれたことになるのかもしれませんが、中国をはじめ、海外の研究者の目から、新たな研究領域が生まれつつあることは、慶賀すべきことでありましょう。本会でも、外国籍の会員の数が次第に増えてまいりました。そうしたみなさまには、また新しい目で、日本の中国学の発展に寄与していただければと期待する次第です。

さて、今年も大会に合わせて理事会、評議員会が開催されました。ここでは、会則および委員会規約の改正が提案されました。その骨子は、委員会規約第1項におい

て「当分の間、将来計画特別委員会を置く。」となっております。ありました将来計画特別委員会について、すでに前回の大幅な会則改正から二十年近くが経過したことから、これを廃止し、時代の必要にかんがみ、新たにデジタル化推進委員会を立ち上げるという点にあります。ここ数年、会務をお預かりして、サーバー管理、またホームページの維持管理、掲載するコンテンツの作成、さらには会員への各種連絡などなど、ハード面ソフト面ともに、デジタルインフラの充実が、これからの本会の発展に必要な不可欠であると痛感させられたが故の提案です。

その他、この機会に、会の活動の実情に合わせた改正の提案をいたしました。例えば出版委員会にある「学会出版部設置問題」、研究推進・国際交流委員会にある「漢文資料センター」、将来計画特別委員会にある「事務所問題」「社団法人化」などの各項は、現時点では時宜を失しているものとして削除（もちろん必要が生ずれば、いつでも議論する所存です）。委員会規約において出版委員会の職掌とされている「名簿編集」は、実際には事務局で作業を行っていることから、こちらは会則第12条の「幹事」のところに「（幹事は）会員情報を管理し」の文言を加える。また同条の「各種委員会委員」のところにある（各種委員会委員は）「会員に限られ」の文言を削除。これは、委員会規約に委員は会員のみがなりうることが明記されているためです。

会則の改正には、会則第17条（会則変更）に「本会則の変更は理事会の議を経て、評議員会において全評議員の3分の2以上の賛成をもって決定する。」とあります。大会前日に開催された評議員会では、残念ながら出席者が評議員の3分の2に届かなかったため、大会後に改めて電子投票により賛否の評決を行った結果、3分の2をはるかに上回る評議員の賛成を得て、日本中国学会会則および委員会規約改正の提案が承認されました。新たなデジタル化推進委員会が有効に機能し、今後の本会の発展に寄与することを願ってやみません。

点から線へ、そして……

池田 智恵

関西大学

2024年1月27日、早稲田大学戸山キャンパスにて「国際若手研究者会議——近現代中華圏における通俗小説と通俗文化をめぐる」と題して小さなシンポジウムを行った。主催は池田の科研だが、もうすでに離れて久しい母校を会場として充実したシンポジウムを行えたのは、後輩の楊駿驍先生と段書暁先生のおかげである。楊先生は共催でもある。

楊駿驍先生の開会の辞から始まり、池田が「通俗小説研究的過去、現在と未来」と題し、大陸と日本で近現代中国通俗小説がいかに研究され、今後どうなっていくかの可能性と、簡単な開催の経緯と主旨を説明した。その後、台湾大学の黃美娥教授が「[源]と[流]: 日治時代台湾漢文/通俗小説図景」という題目で、台湾における通俗小説研究の文脈と歴史を説明した。

続いて四つのセクションで、研究発表と討論を行った。以下簡単に整理しておこう。発表は中国語または英語だったので、題目はそのままにしておく。

第一セクションは「新媒体/新文類当中的傳統的延伸」とし、台湾と日本から四名が研究発表を行った。

「続書伝統:《台湾日日新報》漢文小説对中国古典小説的伝承与改写」(台湾師範大学博士課程 王俐茹)

「石川鴻斎小説相關論述初探」(南山大学講師 趙偵宇)
「在底層社会推理的偵探——淺談劉半農創作的“捕快老王”系列」(北海道大学専門研究員 藤井得弘)

「応天運合人心才有天下: 日治台湾漢文小説〈白樂天泛舟曾遊日本〉探析」(国立虎尾科技大学専任助理教授 莊怡文)

晩清、もしくは日本植民地時代を背景として、新たなメディアの中で通俗小説や通俗文化がいかに伝統文化と切り結んでいるかが明らかになった。

第二セクションは「塑造現代性的試図与其挫折」とし、台湾と日本の四名が研究発表を行った。

「張恨水の旅行小説——『平滬通車』与『蜀道難』」(日本大学教授 神谷まり子)

「我一身不能独活: 晩清民国的「通俗」觀念、共情政治与情動製造」(台湾大学博士課程 陳冠如)

「日中近代文学作品中咖啡文化(女性)的表象研究」(上智大学博士課程 邱月)

「推理小説文類在台湾的初展与受挫:『偵探雜誌』為例」(台湾大学 PD 王品涵)

通俗小説や当時の文化の「近代性」に焦点を当て、それがいかに描かれ、成功または失敗しているかについて討論が行われた。

第三セクションは「作者与読者の感性的変化」とし、韓国からの参加者をまじえて三名の研究発表が行われた。

「台・韓1960年代通俗小説描写的青年恋愛和不安心理——以禹其民的『籃球情人夢』和康信哉的『年輕的樺樹』为中心」(ソウル大学博士課程 柳銀河)

「自「我」的回声——試論三毛の小説筆法」(台湾大学博士課程 蔡欣倫)

「新生代文学中的现实超越与世界多重化表象——以陳春成的短篇小说為例」(早稲田大学講師 楊駿驍)

各地域の各年代の作者と読者の感性を小説から具に読み取り分析する報告から、作者と同程度に、もしくはそれ以上に重要かもしれない読者の姿が垣間見えた。

第四セクションは「新小説文類与其想像力」と題し、

イタリアからのオンライン参加を含む五名の研究発表が行われた。

「在「野蛮」与「文明」之間——清末科学小説中の野人表象」（早稲田大学非常勤講師 段書暁）

『香港時報』与1950年代香港反共文学生産：以林適存（南郭）与黄天石（傑克）的連載小説為討論対象」（台湾大学修士課程 周子謙）

「杜建国与『小靈通漫遊未来』以及『小兔非非』的趣味」（フェリス女学院大学准教授 上原かおり）

A Preliminary Approach to the Field of Fantasy Fiction in Contemporary China: The Community of Fantasy World (2003-2013)（ローマ大学博士課程 グロリア・チェッラ）
「耽美小説中の“古風”通俗化：以墨香銅臭著的『魔道祖師』為例」（ミラノビッコカ大学研究員 アレッサンドラ・ベツツァ）

それぞれの地域と年代に出現したジャンル小説について、それに関わる想像力がいかに作り出されたか、他の地域が受容しているかについて討論が行われた。

コメンテーターとして黄美娥教授、楊駿驍講師、さらに早稲田大学の千野拓政教授、愛知県立大学の張文菁准教授に登壇いただいた。

以上のように、晩清から現在までの通俗小説が持つ伝統的な側面、もしくは近代的な側面について、作者のみならず受容論的な視点、そしてジャンル小説の誕生に関わる際のような想像力について考えるという、研究の問題意識・視点・方法など多くの点で刺激に満ちた一日であった。

参加者は、日本、台湾、韓国、イタリアという四カ国にわたり、修士前期・博士後期課程の学生も含んでいる。各人が現在注目していることについて発表を行った。日本側の参加者は、中華圏の近現代通俗小説研究をこの二十年間牽引してきた研究者に、気鋭の若手揃いである。わたしにとっては、学生時代から論文を拝読してきた、研究活動を見ては尊敬している「仲間」を集めたシンポジウムである。

このシンポジウムは実は三回目の開催となる。2018年に関西大学で、二回目は2021年に台湾側の主催で行われ

た。もとは二年に一度日本と台湾で交代して行う予定だったが、コロナ禍で開催が遅れ、渡航も不可能な時期だったのでオンラインで開催となったのだ。

これは池田が科研を獲得したことに端を発したシンポジウムだが、その背後には研究を開始してからの「縁分」がある。黄美娥教授に最初に出会ったのは、2009年だ。当時、わたしは早稲田大学の博士後期課程の学生で、岡崎由美教授に誘われて淡江大学でのシンポジウムに参加した際の、論文のコメンテーターが黄教授であった。その後、関西大学でPDをしている時にも何度かシンポジウムで顔を合わせていたが、2017年に北京の中国社会科学院文学研究所で再会し、その際に就職した旨を告げると、それなら一緒に何かやろうという話になった。そしてそれが実現したのである。近現代通俗小説研究は、「主流文学」とは異なるアプローチが必要だが、研究されてきた期間がそう長くはない。研究者それぞれが研究対象を見つめ研究方法を模索している。そこでお互いの模索を発表しあい、討論し、ヒントを与え合うことができないかと考えたのだ。これは指導教授である千野拓政先生の長年の研究交流活動から学んだ。研究の道は孤独に見えるが、かつて岡崎由美先生に発表する場を、黄美娥教授のコメントに研究を続ける勇気をいただいた。わたしがかつてもらったものを研究を志す学生や若手の研究者に少しでも分けることができたら嬉しいと研究交流活動を始め、わたし自身もそこから刺激をもらい続けている。

二回目までは、参加者は日本、台湾、中国の出身者だったが、今回は韓国とイタリアが加わった。サバティカルでイタリアに滞在していた時に、今の中国のファンタジー小説やBL小説について研究や翻訳をしている若手の研究者と知り合うことができ、ぜひと声をかけた。欧州からの視線が入るとまた違うことも見える。点は集めれば、線となり、線はよりあわせれば面をつくることもできるだろう。わたしはただの一つの点に過ぎないが、多くの先生からいただいた「縁分」をこれからも少しずつ集めていきたいと考えている。

「第七屆 魏晉南北朝 文學與思想國際學術研討會」 參加記

吉岡 佑馬
都城高専

2024年4月26日～27日の両日にわたり、台湾・成功大学で「第七屆 魏晉南北朝文學與思想國際學術研討會」(同大学中国文学系主催)が開かれた。当会は魏晉南北朝期の儒・仏・道三教の文学と思想を主題とするもので、1990年からこれまで計六回開催されており、筆者はその第七回に参加する機会を得た。本記事ではその概要と、参加を通じて感じたところを報告したい。

一日目の開幕式は4月26日午前9時頃より始まり、陳玉女(成功大学副校長)、高実攻(成功大学文学学院院长)、陳家煌(成功大学文学学院副院长)、黄聖松(成功大学中文系教授兼系主任)の四氏が順に開会の辞を述べられた。四氏はいずれも魏晉南北朝期という時代の特殊性、そして、それを背景に生じた文学と思想の独自性について触れられていた。また、台湾のみならず、中国・香港・日本・韓国・シンガポールおよびアメリカの学者が集う国際会議であることを強調されていた。

開幕式の後には、江建俊氏(成功大学中文系名誉教授)による、基調講演「[相須合徳]—開啓魏晉思想文化精蘊

的鈐鍵」が行われた。江氏は、『於有非有、於無非無：魏晉思想文化綜論』(新文豊出版公司、2009)や『魏晉玄理與玄風研究』(花木蘭文化出版社、2012)、最近では『魏晉玄學辭典』(新文豊出版公司、2022)などを出版された台湾で長らく魏晉思想研究を牽引されてきた大家である。また、二日目の基調講演では、古勝隆一氏(京都大学)が登壇され、「中國中古寫本論語義疏初探」と題して、近年の斯界を揺るがす発見となった慶應本『論語疏』について講演が行われた。その他は、二日間にかけてA会場(思想類論文発表)とB会場(文学類論文発表)に分かれて研究発表が行われ、一日目の夜には「晚宴」が盛大に催された。二日目の最後には閉幕式が行われ、黄聖松、陳家煌、嚴瑋泓(成功大学中文系教授)の三氏が閉会の辞を述べられて閉幕した。

次に、研究発表の内容について紹介する。筆者が主に参加していたA会場では、王弼や『莊子』(郭象注を含む)に関する研究発表が多く見られた。次の通りである。

○王弼に関するもの

- ・ 勞悦強(シンガポール国立大学中文系教授)「王弼思想中的《莊子》魍魎」
- ・ 陳佩君(中国文化大学哲学系副教授)「試析王弼情感論述中「心」的地位與作用」
- ・ 涂藍云(台湾 中央大学中文系助理教授)「從王弼到韓康伯—《周易注》中韓康伯「神」概念析論」
- ・ 嚴浩然(成功大学中文系博士生)「再論王弼政治思想」

○『莊子』に関するもの

- ・ 鄭栢彰(勤益科技大学基礎通識教育中心助理教授)「從《莊子》到郭象《莊子注》審其「言」與「道」之兩行關係」
- ・ 簡光明(屏東大学中文系特聘教授)「郭象以「會通儒道」思想注解《莊子》「絕聖棄智」寓言的理論與方法」

題目から見て取れるように、以上の研究発表は「心」「神」「道」「言」といったキーワードに基づいた思想の体系的分析が主な内容であったが、その中で特に感じたことは、概念による分析の有効性と危険性である。有効性としては、思想家たちが築き上げた諸概念に対する思考

を一つ一つ分析していくことにより、思想家の思想を体系的に理解することに繋がる点を改めて感じた。今回接した研究発表もその一端であり、様々な角度からの分析に筆者自身大いに刺激を受けた。他方、危険性としては、個々に分析された概念体系を思想的観点から俯瞰した際に、同時代の他の思想と整合性が取れるのか否かという点を感じた。上記発表者においても、もちろんそれは常に意識していることかと思われる。しかし、王弼から郭象、郭象から張湛といった思想的観点からの言及があまり見られなかったため、一抹の疑問を抱いたところである。

また、上記研究発表においては、巖氏が引用した伊藤涼氏（東京大学）の研究を除くと、日本の王弼・郭象に関する研究はまったく引用されていない。加賀栄治氏、福永光司氏、蜂屋邦夫氏、中嶋隆藏氏、そして堀池信夫氏の各論など、今でも参照されるべき魏晋思想関係の日本語論文は数多くある。今回の研究発表の内容から見ても、加賀氏や福永氏の論考などは密接な関係にあると思われる。福永光司『莊子内篇讀本』（北京聯合出版公司、2019、王夢蕾訳）や蜂屋邦夫『莊子：邁向超俗之境』（上海古籍出版社、2024、張谷訳）などの中国語訳も出版されているが、日本人学者の思想研究の成果が台湾・中国でどこまで参照されているのか、参照されていないとすれば、それは如何なる理由によるものなのか、気になった。



参会者集合写真

成功大学中国文学系 HP (<https://chinese.ncku.edu.tw/p/406-1142-265818,r1185.php?Lang=zh-tw>) より転載。

続いて今回の参加者について述べる。冒頭でも触れたとおり、台湾の方の他に、日本・中国・韓国・シンガポール・アメリカと国際会議の名にふさわしい多彩な面々が集った。日本からは、古勝氏の他に、河上麻由子氏（大阪大学）、重田みち氏（京都芸術大学）、白景皓氏（身延山大学）、賈光佐氏（東北大学大学院）、そして筆者の計6名が参加した。そのうち、筆者を含めて計4名が研究発表を行った。その題目は以下の通りであった。

- ・河上麻由子「美僧的登場」
- ・白景皓「西晋太康詩風對竺法護釋《正法華經》偈頌體的影響—以“七宝塔品第十一”為中心的研究—」
- ・賈光佐「僧肇的情感世界與《物不遷論》的思想主張」
- ・筆者「唐玄宗《御注老子》及敕撰《老子疏》再考—試論從魏晉南北朝到唐代的《老子》解釋學之綜合」

なお、筆者の研究発表に関しては、拙い中国語の発表であったが、コメンテーターを務めていただいた黃麗頻氏（勤益科技大学基礎通識教育中心助理教授）からは、玄宗の注釈思想ばかりではなく政治思想にも着目し、それらとの相関の中で彼の統一的志向を検討すべきことや、「妙本」概念を扱った中国語論文への目配り不足など、非常に重要な指摘を賜った。この場を借りて感謝を申し上げたい。また、研究発表全体に関して言えば、発表時間12分、論文講評8分というタイトなスケジュールの中で進行する国際会議のリズムに追従しきれなかった感が否めない。それは矢の如く流暢な母語話者の研究発表についていけなかったことを意味している。今回が初めての海外での国際会議への参加であったこともあるが、今後はそのリズムについていけるようになるために研鑽に励みたい。

以上のように、初めての海外での国際会議で様々な経験・勉強をさせていただいた。言語面や習慣面で戸惑うこともあったが、今回の経験を活かしこれからも積極的に海外の学会にチャレンジしていきたい。なお、第八回は2026年に開催予定とのことである。

「中国文学与比較文学」 2024年双年会議 参加記

林 麗婷
龍谷大学

2024年6月24日から25日にかけて、The Association of Chinese and Comparative Literature 2024 Biennial Conference (ACCL、中国文学与比較文学2024年双年会議)が香港科技大学で開催された。ACCLは1980年代にアメリカ中国比較文学協会(ACCLA)として発足し、1990年代後半に独立した非営利の学術団体として再編成された。古典から近現代の中国文学、中国映画、さらには中国に関連する比較文学やカルチュラルスタディーズについて意見交換を行う国際的なプラットフォームとして活動している。

今年の大会テーマは「人類を展望する」(Behold the human)で、人間の文学的表現を認識論的、道徳的、美的観点から再検討するもので、時代やジャンル、方法論、言語など、縦横無尽に論じられそうなテーマだけのことはあり、延べ300名以上の参加者、66のパネルからなる盛大な会となった。大会の進行は主に中国語が使われたが、基調講演やパネルによっては英語も用いられた。休憩や食事の際の参加者同士の交流も、中国語が使われる場面が多かったようだ。

初日の24日は朝9時にスタートし、まずは大会の委員長、Mingwei Song (宋明煒) 教授 (Wellesley College) のアナウンスメントで幕を開け、続いて香港科技大学のLeo Ou-fan Lee (李欧梵) 教授によるオープニングリマークがあった。Lee教授の講演タイトルは「AI時代の人文精神与文字書写」で、人工知能(AI)が人文学や文学創作に与える影響を軽妙な語り口で話し、会場をにぎわした。

大会は二日間にわたって五つの基調講演が設けられた。特に初日のDavid Der-wei Wang (王德威) 教授 (Harvard University) の基調講演「新「人論」二十五種」に多大な感銘を受けた。王教授は英文学者のケアリー・ウルフ (Cary Wolfe) の言説を踏まえ、ポストヒューマニズム研究とは伝統的な人間中心主義にあった盲点を明らかにし、人間と他の種、環境との倫理的関係を探求することを目指すべきだと唱えた。そしてその際には、中国文明の視点からもポストヒューマニズムに対する補足や反論を提起する必要が出てくる。仏教や道教の思想は重要なリソースを提供し、章炳麟の『斉物論釈』は中国現代文論の重要な突破口として考えられるという。『斉物論釈』は、唯識学の「万法唯識」や「物我不二」という観念を取り入れ、主観・客観の区別を超え、人間中心主義を超越する可能性を探っている。この哲学的立場は、仏教の解脱思想や荘子の万物斉一観を通じて、人間の視点を越えた普遍的な存在のあり方を追求する契機を提供しているからだ。王教授はさらに劉再復『人論二十五種』にオマージュを捧げつつ、ポストヒューマニズムの視点に立ち、魯迅「狂人日記」をはじめとする近現代中国文学における「人」を扱う様々なテキストを語り尽くした。

基調講演のあと、参加者は広大なキャンパスに散らばる多くのパネルから、自分が聞きたいものを選んで聴講した。筆者が初日に聞いたなかで印象に残ったのは、広東ローカルバンド「五条人」に関する林錚教授 (中国中山大学) の報告だ。林教授は中国改革開放以来、珠江デルタの発展と共に現れた「城中村」(都市中の村落)、「山寨」(バツタモン)、「打口」(正規音盤の見切り品)といった現象を「未完成の現代性」という概念で捉え直している。ここでいう「未完成の現代性」とはハーバーマスの

言説に触発されたものだが、そこにあるのは完成させる必要がないダイナミズムであり、彼らの活動が権威を挑発するバイタリティーに富んでいることが強調された。

本会議の内容を網羅的に紹介することは筆者の手に余るため、全面的に聴講したパネル511「如何談論1950年代：重構創傷的（不）可能性」の内容を簡単に紹介しておきたい。田村容子（北海道大学）の報告「如何叙述不可言説的故事」は、中国甘粛にある夾辺溝農場に労働矯正に送られた「右派」の知識人が、相次いで餓死していくことを語る楊顯惠『夾辺溝記事』に焦点を当て、とりわけ「上海女人」を取り上げ、極限の状況に置かれた人間の尊厳がいかに保たれるか、またトラウマが文学テキストとして描かれる際の難しさを考察した。続く濱田麻矢（神戸大学）の報告「逆境中的人性底線：楊顯惠『定西孤兒院紀事』」は、小説の背景である1958～1960年に発生した、6万人以上が餓死した甘粛の「通渭事件」を踏まえ、宮地尚子の「環状島」理論を援用して『定西孤兒院紀事』の語りを分析した。さらに、松村志乃（近畿大学）の報告「自伝体叙事と創傷恢復：以從維熙、劉賓雁和王嘯平的自傳為例」は、波瀾万丈の人生を送った三人の知識人が1980年代に書いた自伝をとりあげ、「右派」にされた経験の中で自分の社会的信念と家族との関係との間の葛藤や撞着について比較・検討した。

筆者が参加したパネル603「転折時代：人的情感表達与行動、生命倫理、性別思考之間的複雜關係」は、伝統

や現代文学における感情の問題を再考するものだった。丁乙（京都大学）の報告「從王国維『人間詞話』的成立看其对「情」的態度」は王国維によるショーペンハウアー受容を踏まえて、王のいう「愛すべきもの」、「信ずべきもの」の意味を検討した。宋新珏（関西学院大学）の報告「如何解剖，怎樣超越：郁達夫「三底門答爾」再考」は、大正日本の知識人、特に倉田百三が考えた「愛」や「同情」を手がかりに、西田幾太郎の理性と感情の弁証法と絡めて郁達夫の「センチメンタル」の問題を再考した。黄詩琦（京都大学／中山大學）の報告「後五四時代情感表達的公共性與性別問題：以吳宓的『懺情詩』為例」は、従来文化保守主義者として知られてきた吳宓が、1930年代の新聞に大胆にも『懺情詩』を連載したことに注目し、吳の『懺悔』はルソーの告白と同様、一種のパフォーマティブな行為であると論じた。筆者の報告「革命滅恋愛？：中国科幻小説的情感叙事」は、清末民初の革命を描く三つのSFを選び、とりわけ女性の描かれ方に絞り、革命と恋愛が排他的関係にあるものとして描かれていることについて発表した。

大会の掉尾を飾ったのは香港の作家董啓章氏と台湾の作家駱以軍氏の対談であった。「人工智能与区块链時代的文学写作」というタイトルで、二人の作家は科学と文学の関係や、人工知能による文学創作の可能性について議論を行った。董啓章氏は、ブロックチェーン技術を用いた新しい文学創作と流通の実践を紹介した。作家が自分の作品をNFT（Non-Fungible Token、非代替性トークン）として発行し、新しい販売経路を開拓することで、作家と読者とのつながりがさらに強化されるという。ともすれば悲観的になりやすいAIと文学との関係に新たな可能性を見出すことができた。

二日間にわたる大会は非常に充実しており、あっという間に終わったが、その余韻は今も心に残っている。参加費も不要で、両日ともキャンパス内のレストランで昼食と夕食が無料で振る舞われたのにも感じ入った。劉劍梅教授をはじめとする香港科技大学の方々に心から御礼を申し上げたい。



対談の写真

二〇二四年度日本中国学会賞について

今年度の受賞者は、以下の3名であった。

- ・吉岡佑馬会員〔哲学・思想部門〕。対象論文は「敦煌遺書佚名『老子道德經義疏』初探—華嚴教學の影響および成立背景の検討—」（『学会報』第75集）。
- ・金鑫会員〔文学・語学部門〕。対象論文は「唐代の「仄韻律詩」について」（『学会報』第75集）。
- ・具惠珠会員〔日本漢学部門〕。対象論文は「古代日本漢文學における音聲と書記の往還—〈訓讀〉の美と文字化について—」（『学会報』第75集）。

2024年10月12日（土）、二松学舎大学で開催された第76回大会の総会において、授与式が行われた。授与式での各会員の挨拶は以下の通り。

吉岡佑馬氏

本日はこのような場を設けていただきありがとうございます。このような名誉ある賞を授賞できたのは、指導教員である広島大学の有馬卓也先生、同じく副指導教員の末永高康先生をはじめとして、本会場の二松学舎大のよしみで申し上げますと、週に一度『論語義疏』の読書会を開いてくださった野間文史先生、挙げればきりがありますが先生方からいただいた学恩のおかげに尽きます。

学会賞は集大成ではなくこれからも精進しなさいという激励であると肝に銘じて、これからも地道に研鑽を積んで行きたいと思います。最後に、本受賞論文の査読に関わってくださった先生方、および学会賞へ推薦してくださった先生にもこの場を借りて感謝申し上げます。改めまして本日は誠にありがとうございました。

金鑫氏

岩手大学の金鑫と申します。この度は、日本中国学会賞を頂戴いたしまして、大変光栄に存じております。誠にありがとうございました。

今回受賞の対象となった「唐代の仄韻律詩について」は、私の日本学術振興会外国人特別研究員としての研究

成果の一部です。未熟な点がまだまだあると思いますが、皆様に高く評価され、大変恐縮いたしております。

論文の執筆中には、受け入れ教員の東京大学の齋藤希史先生から、大変ご丁寧なご指導をいただきました。原稿が完成した後、京都女子大学で行われた東山之會と、令和四年度東方学会秋季学術大会で口頭発表いたしました。東山之會の先生方や、東方学会の司会を担当して下さった京都大学の恩師・緑川英樹先生から、貴重なご助言をいただきました。『日本中国学会報』に投稿した後も、査読者の先生方から、大変貴重なご意見を賜りました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

私は今年の4月に、岩手大学教育学部に赴任しました。これまでの博士後期課程および日本学術振興会外国人特別研究員の間、京都大学と東京大学の先生方から丁寧なご指導いただき、またともに学ぶ仲間の皆様からもご支援いただき、誠にありがとうございました。

皆様の御恩を忘れず、いただいた賞を励みに、より一層の研鑽を積んでまいり所在であります。研究者としてまだまだ至らない点が多数ありますが、今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしく申し上げます。

本日は誠にありがとうございました。

具惠珠氏

この度は学会賞を賜りまして誠にありがとうございました。名誉ある賞をいただき大変光栄に存じますとともに、身が引き締まる思いです。選考委員の先生方、これまでご指導賜りました先生方に深く感謝申し上げます。

賞をいただいた論文は、日本漢文において日本語の要素は、いわゆる和習の破格としてのみ反映されているだろうか、という問いから出発したものです。それを具体的に論じる上で、訓読の美感を生み出す句法に注目しましたが、論じるべき問題はまだまだ残されています。今回の受賞を励みに精進して参る所存です。重ねて御礼申し上げます。

各種委員会報告

【大会委員会】

委員長 野村 鮎子

(1) 第76回大会について

2024年10月12日(土)・13日(日)、東京の二松学舎大学九段キャンパス(代表:牧角悦子会員)において第76回大会が開催されました。今回の大会では研究発表(哲学・思想部会11名、文学・語学部会16名、日本漢学部会9名、歴史部会6名)と特別シンポジウム「古典学の方法論」と、書評シンポジウムが2つ、次世代シンポジウムが1つという多彩なプログラムでした。二松学舎大学のは、交通の便もよく、両日とも好天に恵まれたため、参加者数は391名(会員314名 非会員77名)にも達しました。うち、事前登録者数は286名(会員258名 非会員28名)でした。なお、開催校が企画した特別シンポジウムには非会員の方でもYouTubeで視聴できるようにしましたところ、再生数は97回でした。懇親会の会場は13階建てのスカイツリーと東京タワーを見ることができる最上階のラウンジでしたが、キャパシティの問題から早くに枠が埋まってしまったのです。

(2) オンラインによる参加申し込みと参加費の支払い形式

本大会より、事前の参加申し込みと参加費の支払いがオンラインになりました。これまでは、大会準備会がゆうちょ銀行で口座を開設し、さらに振込用紙に参加費や弁当代、懇親会等項目を印刷し、それを大会要項ともに会員に発送するという方式でした。しかし、近年マネーロンダリング等の対策が強化され、大会準備会という法人格のない団体が口座を開設することは難しくなっています。スマートフォンでの操作に不慣れな一部の方は戸惑われたと仄聞していますが、二松学舎大学では従前どおり当日払いにも対応していただきました。

オンラインでの申し込みや決済は、郵便局に足を運びづらい会員にとっては大きなメリットです。また開催校の作業を効率化することもできます。従前の方式ですと、準備会はゆうちょ銀行から五月雨式に届く振込取扱票の明細と振込の総額が合致しているかどうかを点検しつつ大会参加者名簿を作成せねばならず、膨大な手間がかかりました。会員におかれましては新方式にご理解を賜り

たくよろしくお願いいたします。今後はあらたに創設される「デジタル化推進委員会」と協同し、大会のいっそうのデジタル化を推進していきたいと思っております。

なお、大会アンケートは今年度から大会委員会の所管になりました。回答へのご協力ありがとうございました。今回の大会アンケートの結果は4月以降にwebページで公開する予定です。

(3) 大会託児サービスについて

日本中国学会では第67回大会(2015) 國學院大學の時に外部委託の形ではじめて学会託児サービスを導入しました。爾来、対面方式の大会では学内に臨時託児室を設置し、保育士配置や設営などの基本料金を大会開催経費が負担することで会員に安価な託児サービスを提供してきました。今回は開催校の設備の都合上、会場内に臨時託児室を設けることができず、会員自身で近隣の託児サービスを手配利用し、開催校がその利用料の補助金を支給する形になりました。また、開催校の好意でキッズルームも設けていただきました。

託児サービスにはさまざまな方式があり、臨時託児室の設置のほか、開催校が有している託児制度を利用する方式、また今回のように他の施設を利用した会員に補助金を支給する方式などがあり、開催校の事情によって一概に決められるものではありません。しかし、大会開催時に託児サービスの提供を図ることは、学協会所属の学会としての責務であり、今年度の理事会でもいかなる方式にせよ来年度以降も大会時の託児サービスは継続する方針であることが確認されました。

(4) 2025年度第77回大会について

2025年度日本中国学会第77回大会は、九州大学伊都キャンパス(大会準備会代表 東英寿会員)において10月11日(土)・12日(日)に開催されます。第76回大会の会員総会では、東会員が「伊都キャンパスは『三国志』魏志に邪馬台国へのルートとして登場する伊都国に由来する土地であり、ここに移転した九州大学を見にぜひお越しいただきたい」と挨拶しておられました。

2024年度 会員動向／新入会員一覧

●会員動向（2024年10月1日現在）

総会員数1,483名、準会員数43機関、賛助会員数13社

●退会会員

○退会申出会員（今年度1回理事会承認分） 20名＋3機関

武田 雅哉	阿保 聖子	石丸 羽菜
王 晴	大山 昌道	亀井 有安
佐藤 正光	小路口 聡	立松 昇一
内藤 正子	野間 信幸	村越真貴美
湯山トミ子	矢野 賀子	岩崎日出男
小林 和代	下定 雅弘	劉 小俊
玉木 尚之	山口 綾子	

跡見学園女子大学図書館
 国土館大学東洋学研究室
 京都大学文学部中国哲学史研究室

○退会申出会員（今年度第2回理事会承認分） 11名＋1機関

石本 裕之	飯塚 容	桂 誠一郎
清水賢一郎	中野 千穂	森山 秀二
北岡 正子	坂内 千里	中村 春作
任 占鵬	松岡 純子	

活水女子大学図書館

○4年間の会費滞納による退会会員 24名

●住所不明会員 21名

曾 小蘭	楊 世帆	井上 雅隆
段 書暁	張 欣	張 瀛子
余 祺琪	綿本 誠	末岡 宏
田中 邦博	西口 智也	池田 智幸
成 高雅	滝野 邦雄	張 齡云
陳 駿千	黎 小雨	安本 武正
李 岳陽	李 麗君	李 華雨

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください。

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

●新入会員一覧

10月11日に開催された2024年度評議員会において入会が承認された方々は、以下の通りです。

●通常会員 21名

賈 海涛	神奈川大学
呉 嶧	京都大学（院）
奈良 奏美	皇學館大學（院）
池内早紀子	大阪公立大学（院）
范 倩彤	大阪公立大学（院）
黄 嘉慶	東京大学（院）
福原 早希	筑波大学（院）
欧陽 懷蒙	筑波大学（院）
劉 明鏞	九州大学（院）
盧 信怡	大阪大学（院）
朝倉 智心	東京大学（院）
鮑 功瀚	大阪大学（院）
劉 璿旖	岡山大学（院）
胡 睿	東京大学（院）
荒川 兼汰	名古屋大学（院）
魯 為	九州大学（院）
馬 佳芸	九州大学（院）
遇 禕揚	九州大学（院）
松原 えみ	東京大学（院）
安田 英希	九州大学（院）
郡司 祐弥	一橋大学（院）

●国外会員 2名

徐 一然	北京大学
梁 旭璋	重慶交通大学

なお、以下の方々については6月2日付で開催された臨時評議員会（メール審議）において入会が承認され、すでに今年度の会員名簿に掲載されています。

●通常会員 35名

程 雪茹	柴田 寿真	張 夢鴿
胡 勝	劉 吟衡	田中 豊
陳 竹	名越 健人	武 小萱
林 紅	吳 雨清	伍 晨曦
潘 虹智	閻 瑜	陳 惠陽
蔣 薰誼	大木 拓海	蘇 德
張 錦	邢 彤彤	杜 軼文
謝 婧	鄭 瑞雪	榭原 慎二
王 淇	王 一	趙 祥茹
堀尾 裕真	代 珂	黃 舒銘
岡本 光平	喬 竜川	陳 敏
宋 元祺	吳 雨桐	

●国外会員 1名

王 喬慈

訃 報

『学会便り』2024年第1号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

(敬称略)

林 克 (関東地区)	2022年9月9日
市川 清史 (関東地区)	2024年1月6日
小川 陽一 (東北地区)	2024年1月20日
是永 駿 (近畿地区)	2024年1月27日
佐藤 正光 (関東地区)	2024年6月10日
矢嶋美都子 (関東地区)	2024年11月6日



2025～26年度役員一覽

◆理事長

小島 毅

◆副理事長

浅見 洋二 牧角 悦子

◆理事

伊東 貴之 上田 望 古勝 隆一 小松 謙 齋藤 智寛
鈴木 将久 田村 容子 東 英寿 柳川 順子 渡邊 義浩

◆監事

内山 精也 (主席) 吾妻 重二 岡崎 由美

◆評議員

秋吉 收	明木 茂夫	浅見 洋二	吾妻 重二	有馬 卓也
井川 義次	伊東 貴之	上田 望	上原 究一	宇佐美文理
内山 精也	内山 直樹	大木 康	大西 克也	大橋 賢一
岡崎 由美	垣内 景子	加藤 徹	川島 優子	木津 祐子
河野貴美子	古勝 隆一	小島 毅	小松 謙	近藤 浩之
齋藤 智寛	齋藤 希史	佐藤 大志	佐野 誠子	静永 健
末永 高康	鈴木 将久	洲脇 武志	高津 孝	高山 大毅
谷口 洋	谷口真由実	田村 容子	陳 捷	鶴成 久章
中里見 敬	中島 隆博	二階堂善弘	野村 鮎子	濱田 麻矢
早坂 俊廣	東 英寿	藤井 倫明	星野 幸代	堀川 貴司
牧角 悦子	松尾 肇子	三浦 秀一	水上 雅晴	緑川 英樹
矢田 尚子	柳川 順子	横手 裕	和田 英信	渡邊 義浩

◆顧問

池田 秀三	池田 知久	今鷹 真	加地 伸行	川合 康三
金 文京	竹村 則行	土田健次郎	富永 一登	野間 文史
藤井 省三	三浦 國雄	村山 吉廣	吉田 公平	

◆幹事

田中 有紀 山路 裕

日本中国学会 2023年度 (令和5年度) 収支決算書

2023年4月1日～2024年3月31日

(単位:円)

科目	予算	決算	摘要	差額
収入の部				
1. 前年度繰越	¥23,804,171	¥23,804,171		¥0
2. 会費	¥9,000,000	¥8,338,000		¥-662,000
3. 寄付金	¥800,000	¥752,000		¥-48,000
4. 預金利息	¥200	¥165		¥-35
5. 著作権料分配金	¥0	¥0		¥0
総計	¥33,604,371	¥32,894,336	(A) 収入総計	¥-710,035

科目	予算	決算	摘要	差額
支出の部				
1. 事務局総務費	¥1,720,000	¥1,327,512	(1)～(7)	¥392,488
(1)印刷費	¥480,000	¥390,347	「便り」・封筒印刷費を含む	¥89,653
(2)通信費	¥480,000	¥397,499	「便り」発送費を含む	¥82,501
(3)交通費	¥100,000	¥80,120		¥19,880
(4)消耗品費	¥50,000	¥19,040		¥30,960
(5)庶務処理費	¥50,000	¥0		¥50,000
(6)雑費	¥350,000	¥230,506	親手類、消費を含む、委託	¥119,494
(7)業務委託料	¥210,000	¥210,000	斯文会	¥0
2. 事務局人件費	¥1,740,000	¥1,700,000	(1)(2)	¥40,000
(1)幹事手当	¥540,000	¥540,000	幹事3人体制	¥0
(2)謝金	¥1,200,000	¥1,160,000	事務局補佐員謝金を含む	¥40,000
3. 事務局会議費	¥200,000	¥141,301	(1)(2)	¥58,699
(1)会議費	¥100,000	¥52,813		¥47,187
(2)役員旅費	¥100,000	¥88,488	親回理事会はオンライン開催	¥11,512
4. 事業費	¥4,880,000	¥5,174,175	(1)(2)	¥-294,175
(1)学会報等刊行費	¥3,880,000	¥4,174,175	イ～ニ	¥-294,175
イ. 印刷費	¥2,000,000	¥2,279,860	学会報及び名簿	¥-279,860
ロ. 編集費	¥1,200,000	¥1,200,000		¥0
ハ. 翻訳謝金	¥330,000	¥324,550	英文要新成・中国語訳読編纂	¥5,450
ニ. 発送費	¥350,000	¥369,765	(株)サンセイ業務委託等	¥-19,765
(2)学術大会運営費	¥1,000,000	¥1,000,000		¥0

科目	予算	決算	摘要	差額
支出の部				
5. 各種委員会運営費	¥1,260,000	¥1,015,920	(1)～(7)	¥244,080
(1)大会委員会	¥65,000	¥5,000		¥60,000
イ. 通信費	¥5,000	¥0		¥5,000
ロ. 会議・旅費	¥50,000	¥0		¥50,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥0		¥5,000
(2)論文審査委員会	¥800,000	¥706,603		¥93,397
イ. 通信費	¥120,000	¥104,259		¥15,741
ロ. 会議・旅費	¥600,000	¥522,187		¥77,813
ハ. 謝金	¥60,000	¥70,000		¥-10,000
ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	¥10,157		¥9,843
(3)出版委員会	¥230,000	¥168,356		¥61,644
イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
ロ. 会議・旅費	¥200,000	¥147,840		¥52,160
ハ. 謝金	¥10,000	¥10,000		¥0
ニ. 学会便り編集費	¥10,000	¥10,000		¥0
ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥146		¥4,854
(4)選挙管理委員会	¥20,000	¥5,470	非改選年	¥14,530
イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥100		¥4,900
(5)研究推進・国際交流委員会	¥20,000	¥38,554	書評シボジウム準備費により赤字	¥-18,554
イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥33,184	書評シボジウム準備費を含む	¥-28,184
(6)広報委員会	¥105,000	¥86,292		¥18,708
イ. 通信費	¥5,000	¥538		¥4,462
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥20,000	¥20,000	幹事2人体制	¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	¥36,754	ホームページ維持費を含む	¥13,246
ホ. ホームページ管理費	¥25,000	¥29,000		¥-4,000
(7)将来計画特別委員会	¥20,000	¥5,645		¥14,355
イ. 通信費	¥5,000	¥370		¥4,630
ロ. 会議・旅費	¥5,000	¥0		¥5,000
ハ. 謝金	¥5,000	¥5,000		¥0
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	¥275		¥4,725
1～5	¥9,800,000	¥9,358,908		¥441,092
学会基金積立金拠出	¥0	¥0	学会基金(学会費)に充当	¥0
特別寄付金会計拠出	¥0	¥0	特別寄付金会計(電子支)に充当	¥0
予備費	¥23,804,371	¥0	支出費目としては計上しない	¥23,804,371
合計	¥33,604,371	¥9,358,908	(B) 支出合計	¥9,358,908
次年度繰越金	-	¥23,535,428	(A) 収入総計 - (B) 支出合計	¥23,535,428
総計	¥33,604,371	¥32,894,336		¥710,035

学会基金

	基本金	
収入の部		
前年度繰越金	¥4,300,000	
学会基金積立金拠出	¥918,132	
預金利息	¥0	
信託収益金	¥67	
合計	¥0	
支出の部		
日本中国学会賞	¥80,000	
次年度繰越金	¥838,199	
合計	¥918,199	

特別寄付金会計

収入の部		
前年度繰越金	¥2,860,016	
特別寄付金会計拠出	¥0	
特別寄付金	¥0	
預金利息	¥24	
合計	¥2,860,040	
支出の部		
日本中国学会賞(上乘せ分)	¥40,000	
大会発表者宿泊費補助金	¥230,000	
次年度繰越金	¥2,590,040	
合計	¥2,860,040	

上記の通り、相違ないことを認めます。

備考(基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

2024年4月22日
日本中国学会監事

内山 精也
坂角 悦子
和田 英信

日本中国学会 2024年度 (令和6年度) 予算書

2024年4月1日～2025年3月31日

(単位：円)

	科目	予算	摘要
収入の部	1. 前年度繰越	¥23,535,428	
	2. 会費	¥9,000,000	
	3. 寄付金	¥800,000	
	4. 預金利息	¥200	
	5. 著作権料分配金	¥0	
	合計	¥33,335,628	

	科目	予算	摘要
支出の部	1. 事務局総務費	¥1,920,000	(1)～(7)
	(1)印刷費	¥480,000	「便り」・封筒等を含む・改選年
	(2)通信費	¥480,000	「便り」発送費を含む・改選年
	(3)交通費	¥100,000	
	(4)消耗品費	¥50,000	
	(5)庶務処理費	¥50,000	
	(6)雑費	¥550,000	振込手数料・対外費を含む・改選年
	(7)業務委託料	¥210,000	斯文会
	2. 事務局人件費	¥1,740,000	(1)(2)
	(1)幹事手当	¥540,000	幹事3人体制
	(2)謝金	¥1,200,000	事務局補佐員謝金を含む
	3. 事務局会議費	¥500,000	(1)(2)
	(1)会議費	¥100,000	
(2)役員旅費	¥400,000	年度末新旧会理理事会を対面開催予定	
4. 事業費	¥5,230,000	(1)～(2)	
(1)学会報等刊行費	¥4,230,000	イ～ニ	
イ. 印刷費	¥2,300,000	学会報及び名簿	
ロ. 編集費	¥1,200,000		
ハ. 翻訳謝金	¥330,000	英文要旨作成・中国語版翻訳補助謝金	
ニ. 発送費	¥400,000	学会報印刷会社への業務委託等	
(2)学術大会運営補助費	¥1,000,000		

	科目	予算	摘要
支出の部	5. 各種委員会運営費	¥1,390,000	(1)～(7)
	(1)大会委員会	¥65,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥50,000	
	ハ. 謝金	¥5,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(2)論文審査委員会	¥800,000	
	イ. 通信費	¥120,000	
	ロ. 会議・旅費	¥600,000	
	ハ. 謝金	¥60,000	
	ニ. 消耗品・雑費	¥20,000	
	(3)出版委員会	¥230,000	
	イ. 通信費	¥5,000	
	ロ. 会議・旅費	¥200,000	
	ハ. 謝金	¥10,000	
	ニ. 学会便り編集費	¥10,000	
	ホ. 消耗品・雑費	¥5,000	
	(4)選挙管理委員会	¥120,000	改選年
	イ. 通信費	¥15,000	
	ロ. 会議・旅費	¥60,000	
ハ. 謝金	¥40,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
(5)研究推進・国際交流委員会	¥50,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥35,000		
(6)広報委員会	¥105,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥20,000	幹事2人体制	
ニ. 消耗品・雑費	¥50,000	ホームページ維持費を含む	
ホ. ホームページ管理費	¥25,000		
(7)将来計画特別委員会	¥20,000		
イ. 通信費	¥5,000		
ロ. 会議・旅費	¥5,000		
ハ. 謝金	¥5,000		
ニ. 消耗品・雑費	¥5,000		
1～5	¥10,780,000		
学会基金積立金拠出	¥0	学会基金(学会費)に充当	
特別寄付金会計拠出	¥0	特別寄付金会計(若手支援)に充当	
予備費	¥22,555,628		
	合計	¥33,335,628	

学会基金

	基本金	¥4,300,000
収入の部	前年度繰越金	¥838,199
	預金利息	¥100
	信託収益金	¥0
	合計	¥838,299
支出の部	日本中国学会賞(基金分)	¥240,000
	次年度繰越金	¥598,299
	合計	¥838,299

特別寄付金会計

収入の部	特別寄付金会計拠出	¥0
	前年度繰越金	¥2,590,040
	特別寄付金	¥0
	預金利息	¥10
	合計	¥2,590,050
支出の部	日本中国学会賞(上乘せ分)	¥120,000
	大会発表者宿泊費補助金	¥200,000
	次年度繰越金	¥2,270,050
	合計	¥2,590,050

備考 (基本金内訳)

奥野基金	¥500,000
佐藤基金	¥200,000
池田基金	¥300,000
伊藤基金	¥300,000
積立基金	¥3,000,000

事務局からのお知らせ

彙報

2024年度第1回理事会（6月2日開催、オンライン会議）での決定事項について、6月2日付で臨時評議員会（メール審議）を開催した。報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- 2024年度日本中国学会賞受賞者の決定について
吉岡 佑馬 会員 [哲学・思想部門]
「敦煌遺書佚名『老子道德經義疏』初探——華嚴教學の影響および成立背景の検討——」
- 金 鑫 会員 [文学・語学部門]
「唐代の「仄韻律詩」について」
- 具 惠珠 会員 [日本漢学部門]
「古代日本漢文學における音聲と書記の往還——〈訓讀〉の美と文字化について——」

【審議事項】

- 新入会者の決定について
- 2024年度定例評議員会及び次期評議員会の開催日程について

10月11日に開催した2024年度評議員会・次期（2025-26年度）評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

【報告事項】

- 理事長報告
- 2025-26年度評議員選挙の結果について
- 2025-26年度理事長選挙の結果について
- 各種委員会報告
- 『日本中国学会報』第76集及び会員名簿の発行について
- 学会報編集担当・大会開催校等について（2025年度）
学会報編集担当
大瀧 貴之 会員（鹿児島大学）
学界展望執筆担当
哲学／鶴成 久章 会員（福岡教育大学）
文学／星野 幸代 会員（名古屋大学）

語学／日本中国語学会

学会便り編集担当（2024年第2号・2025年第1号）

古勝 隆一 会員（京都大学）

大会開催校 九州大学

- 会員動向について
- その他

【審議事項】

- 2023年度決算・監査報告
- 2024年度予算案
- 新入会員の承認
- 日本中国学会会則および委員会規約の改正について
- 「日本中国学会「特別寄付金会計」運用内規」の変更について
- 2024年度総会次第について
- 2025-26年度副理事長・理事の委嘱について
- 2025-26年度監事の選出
- その他

10月12日の2024年度総会において、評議員会での議決事項を報告した。

◎論文審査委員会委員の退任と追加について

松浦恆雄会員が2024年10月11日付で論文審査委員会を退任することとなりました。また、津守陽会員を同年10月11日付で同委員会委員に委嘱することとなりました（任期は2024年10月11日から2025年3月31日まで）。

◎会則・委員会規約の改正について

2024年度第2回理事会（10月11日開催）、2024年度評議員会（同日開催）、持ち回り評議員会による電子投票を経て、日本中国学会の会則と委員会規約を改正することが承認されました（改正は2025年4月1日付）。将来計画特別委員会を廃止し、デジタル化推進委員会を新たに設置すること、および各種委員会・事務局の職掌について、実情に合うように文言を修正することが、このたび

の改正の主な内容となります。なお、具体的な改正箇所につきましては、学会ホームページ「お知らせ」に掲出の「日本中国学会会則・委員会規約 新旧対照表」をご参照ください。

◎「日本中国学会「特別寄付金会計」運用内規」の変更について

日本中国学会では、2022年度より、「大会で発表（通常の発表のほか、次世代シンポジウム・書評シンポジウム等のシンポジウム企画での登壇を含む）する若手会員のうち、遠方に在住し、宿泊を必要とする者が、宿泊費を私費により支出する場合」に一律で1万円の補助金を支給する、という制度を開始いたしました。この補助金は「特別寄付金会計」より支出されますが、その運用内規における「若手会員」の定義について、国外会員であっても条件を満たせば該当することが明確になるように文言を修正いたしました。

◎特別寄付金会計寄付者（20万円以上、歴代）

2021年度：加地伸行会員（300万円）

◎会費の納付について

会費未納の方は、まずは事務局までお問い合わせ下さい。2ヶ年（2023・2024年度）未納の方には、今年度の学会報を送付していません。また、4年間滞納されると除名処分となりますのでご注意ください。

◎住所・所属機関等の変更について

住所や所属機関等に変更がありましたら、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。郵便、あるいはファックスでも受け付けてはおりますが、なるべく電子メールをご利用くださいますようお願いいたします。

◎クレジットカードによる会費決済について

海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を行っております。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ペー

ジの URL をお送りいたします。なお、利用可能ブランドは VISA・MASTER のみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局

電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org

郵便：〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内

ファックス：03-3251-4853

ゆうちょ銀行振替口座

口座番号：00160-9-89927

加入者名：日本中国学会

●●●●● メールアドレス登録のお願い ●●●●●

日本中国学会では、会員のみなさまのメールアドレス登録をお願いしています。まだご登録頂いていない方はホームページの「メールアドレス登録（会員専用）」（URL：https://nippon-chugoku-gakkai.org/?p=2274）よりご登録をお願いいたします。

パスワードは sinology1234 です。メールアドレスの変更も、上記の登録フォームから可能になりました。

登録フォームにアクセスできなかった場合は、事務局（info@nippon-chugoku-gakkai.org）宛に、メールアドレスをお知らせください。

「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に掲載することになっています。

2024年1月から同年12月末までに開催された国内学会の原稿は、来年（2025）2月末までに、下記あてに電子メールでお送りください。

従来ご報告が無かった学会（研究会）のご報告も歓迎いたします。

なお、紙面の都合上、お送りいただいた原稿を編集局で一部加工することがあります。また、校正はありませんので、あらかじめご承知おきください。

また、Zoom や Teams、あるいは YouTube 動画配信などさまざまな開催形態で行われたと思いますが、本紙ではそれらを一括して「オンライン開催」と表示させていただきます。

原稿送付先：kogachiryuichi@gakkaidayori@gmail.com

（京都大学・古勝隆一あて）

「会員論著目録（2024年）」作成への協力をお願い

会員各位

日本中国学会理事長 大木 康

すでに日本中国学会ホームページにおいてご案内のように、本学会では、デジタル化推進の一環として、引き続き、下記のとおり、「会員論著目録（2024年）」の作成を試行することになりました。会員の皆様に、学会ホームページ内の「会員論著目録」の項目内に設けました Google フォームのアンケートに回答入力する方法でデータをご提供いただいた上で、作成した目録は、学会ホームページでの公開を予定しております。

つきましては、入力に必要なパスワードをお知らせしますので、是非とも、学会ホームページ内の当該項目にアクセスの上、入力にご協力くださいますよう、お願い申し上げます。

記

- 【対象】 2024年1月～12月に公刊された著書・著書等（翻訳、書評、短報など MISC も含む）
- 【入力】 原則、会員自身が入力する。ただし、入力が困難な場合は、メールや書面による提出を学会事務局で受け付ける。
- 【入力期間】 2024年12月～2025年3月末
- 【パスワード】 roncho2024
- 【分類・区分】 従来の形式を踏襲し、「哲学」「文学」「語学」の3つに大別した上で、時代・分野等に細分する。また、複数の区分にまたがる内容の論著については、必要に応じて、同じ内容のデータを複数回、関連する区分に回答入力できることとする。

なお、「会員論著目録」（2022年）（2023年）の補遺についても、同期間、入力できますので、該当の場合は、ご記入くださいますよう、お願いいたします。過去2年間の内容については、学会ホームページでご確認いただけます。

※不明の点がありましたら、学会事務局にお問合せください。

「日本中国學會報」論文執筆要領

日本中国学会

応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等を合わせて、以下のよう定める。ワープロ使用の場合、用紙サイズはA4、1行30字、毎ページ40行、文字は本文、注ともに10.5ポイントによって印字し、18ページ以内（厳守）とする。この書式に合わないものは、受理しないこともあるので、注意すること。採用論文刊行の段階で、規定のページ数を超過した場合には、調整を求めることがある。なお、手書き原稿提出の場合は400字詰原稿用紙54枚以内（厳守）とし、論文が採用された場合、電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、『學會報』の組版における占有面積により文字数を換算する。『學會報』半ページ分が、ほぼ25行（1行30字）である。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、横書きも可とする。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、刊行にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。ただし、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。刊行にあたっては、本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントの活字を使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所明記する。特に必要とするものについては、簡体字等での引用も可とする。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。注の表記につい

ては、本学会が定めたガイドラインに沿うことが望ましい。

10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあっては、ウェード式・漢語拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通用している固有名詞（例：孫逸仙 Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

論文要旨

11. 応募時の原稿には2000字以内の和文の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、1200字程度の日本語要旨を添付する。

原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月15日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内 日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想・文学・語学、日本漢学、歴史）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

校正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

抜刷

18. 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

その他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

(昭和62年10月11日制定)	(平成13年5月13日修正)
(平成14年10月13日一部修正)	(平成15年10月5日一部修正)
(平成19年10月7日一部修正)	(平成20年5月17日一部修正)
(平成21年10月11日一部修正)	(平成22年6月6日一部修正)
(平成22年10月10日一部修正)	(平成23年10月9日一部修正)
(平成24年10月7日一部修正)	(平成25年3月31日一部修正)
(平成25年10月13日一部修正)	(平成27年10月10日一部修正)
(平成29年6月12日一部修正)	(平成30年6月3日一部修正)
(令和4年10月5日一部修正)	